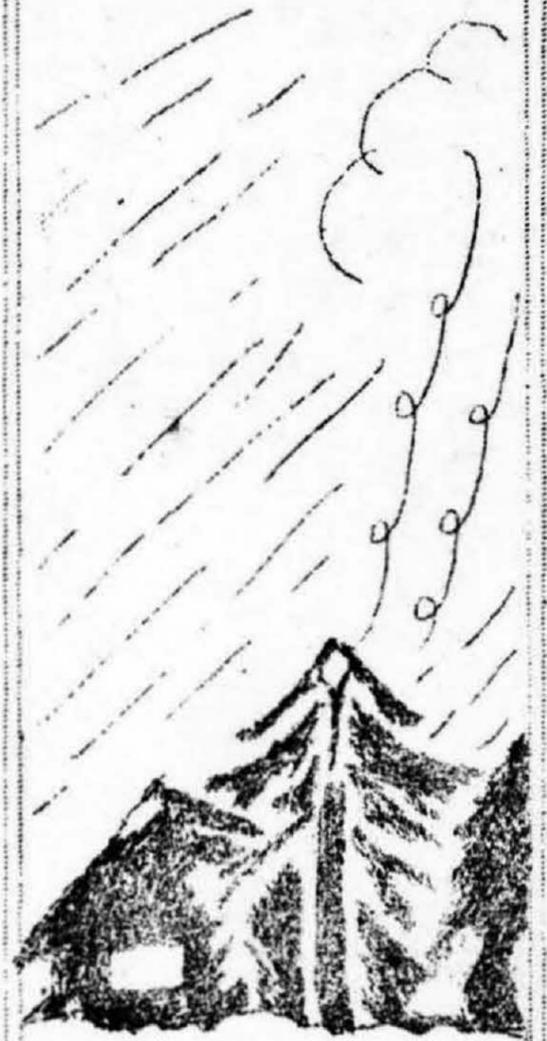


會報



号六第年二第

昭和六年七月四日発行

通巻十一号

第一信

御無沙汰致しました、生来の筆不性が今度の旅行では一層筆不性になつて了つてどうやら方々からお小言が来さうだ、鬼に角木だすつかり落着かない為か或いは時間も惜しいと云ふ派もあるし、中々ペンが侍でない、何しろ出す処は山程あるのに書き手は一人だから耐らない、そこで無性子を發揮して針葉樹會の連中には全部の人へ針葉樹會報を以て代へる事にした、不意お許しを乞ふ。

處で長いと思つた船の生活も終つて兎るとそれ程でもなく巴里に着いたのが五月四日、それから今日が廿七日だから彼是十日余り巴里生活をやつて見た、中々面白い、然し語学が不得手の処へもつて来て専門部時代にやつた佛語と来てゐる、その点甚だ不自由だ、それに顔色が黄い、此の点も余り嬉しくない、巴里へ来たものが嫌でも思ふだらう事は自分が巴里人でなかつた事の残念さであ

らう、金のある白色人種ならばとに角面白おかしく暮せる処だ

町は奇麗だし女はそれ以上美しいし若いものには耐らない、幸に小生は金もないし一黄色と来てゐるから先女難よけのお守を持つてゐるようふものだとの点は安心して貰ひたい

さて目下は老人夫婦の素人下宿に居る、朝はパンにコーヒ、晝と夜だけ満足に食べさしてくれる、初めの中は兎物に歩く為かお腹のへる車場所はセーヌ河の沿り市の中心だ、直ぐ後ろが倒のソートルゾイの寺院、隣が警視廳に消防署、前が裁判所どうだい此の用心の好い処はあるまい、それに親切だ、それで小説に出来さうなとロインが居れば申分ないんだが、ハ……、余り山岳会報に、んふ與太もそれこそお叱言もの、この辺で矢禮、又

(ボコチン)

赤城のつゝじ

八年振で赤城へ行つて驚いた。自動車網の行き渡つてゐるのに。前橋口は箕輪迄、水沼口は一の鳥居迄(今年の夏は二ノ鳥居まで)。大胡口は三夜沢迄、自動車が豊る。もう二三年すると大沼まで登つて、大沼の周囲にドライヴウェイが出来るだらう。夏来りなば大沼湖畔五百戸の天幕村と化

し、祭禮には五十軒の屋臺店と二万の参拜大衆で山が埋まるといふ。こう開けては喜んでいゝのか、喜んでいゝのか万感胸に迫つて泣けて来る。「赤城のつゝじは満開も稍すぎでいくらか散りか、つてませう」といふ鉄道案内所の御託宜をおそれかしてゐ、遅れてならじと出掛けたのが、月は夜れど日は同じ殿様の命日ならぬ六月十四日。さても新坂平を見ればア、ラ不思議や咲いたるつゝじのあらばこそ、悉く芝筆の穂先に異ならず、未味がかりたる株とてなかりけり。烈火の如く怒れる餘憤を東京迄持越し、先の案内所に嚴重なる抗議を申込で曰く

「由來貴省の案内屋、誤報を以て天下に害毒を流すこと一雨ならず。冬の候の事なり。水上附近積雪多し来れスキーヤーよといふがま、に赴く者數百名、水上に下車すれば見渡す限り雪の土もあらはにて富士スキーの名文より起り、スキートに好適なりとて勇躍諏訪に至れば小波の間に帆掛舟を望みセイリングも又可なるを悟れりといふ。今又つゝじ満開なりとて急ぎ至れば蕾固くして槍の穂先の如し……」流石の案内所グーの音も出さず、漸く溜飲を下げたのであるが、此話を聞いた皮肉な奴が云つたことだ。

「流石高貴上手だ。チヤンと知ってるんだよ。昔といつちや客がつかねえからな」

エフエーのインキ

○僕の知人のAさんが最近京橋附近のあるカフエーに這入つたと思ひ給へ、Aさんは大の左黨であるもんだから商用の合間にも一十さしめさねば承知出来ないといふ代物、それで例によつてカクテルが何かでない、気持になり、這つたがふと得意先へ電話をかけたねばならぬ事を思ひ出して席を立つた。帳場だつたか女給の監督だつたか忘れが「電話なら女にかけさせませう」と云ふので嫌俺がかけるとも言へずそのまま、頼んだのです、歸りがけの勘定の中に電話かけ賃一円也とある。Aさんお酒を飲みに来ておこるのもやぼだと思ひ内心怒の情にかられながらそのカフエーを出ました。もう誰があんな所へ行くと恐つて見たのは當り前ですが向ふはそれはいゝんださうです、そんな風なねがもる等の鴨はいくらも彼からひつかりに来るからとすつてと云ふ話。

○少くとも針葉樹会員ではそんな店へ行つた人はないでせうが此の頃カフエーと云ふものはエロならで夜も明けぬし日も暮れないのださうです。ビール一本と豆を一回とつてそれでいくらとられたおんて云ふのはさう珍しい事件じゃない。併し茲に珍しい新戦術が現れたから御報告して置かふ。

夕一さんでもへーさんでも何でもいゝ鬼に角女給は相手の鼻下長に向つてぬぐるんです、つねえまーさんあたしにコクテルおごつてくれない？あたしにはウイスキーね、あの向ふに居る君ちやんにもぬしてな事になる。フウイしよし／＼しふんてことになると今までボツクスの影でコツクリをやつてた連中まで起きて来て一大酒宴が展開されるんだ。吾々はよく酒の色をした余り旨くもない茶なるものを代用にする事がある（これを称してチヤケと云ふ）此の女給達は暖場とぐるになつて此の手を應用する事は余りどなたも知つてゐると云ふわけには行かぬだらう。シークなる彼女等の口にするものは色は同じでも純粹の味なのだ。これによつて彼女等は一杯につき一月につき四十銭をさく取する事が出来るんだ。何と諸君ボロイ儲がやおまへんか。何熊公の家でもそれをやつてゐるつて、さうかと思はれない。

(熊)

記 録

五月廿日

三十一日

谷川岳西黒沢

中川孫一

六月六日

大岳山馬頭刈尾根

松浦雄英太郎

高橋要二、松木謙三、磯野沖藏

他學生三名、

六月十四日

赤城つ、お見物

中川孫一

消 息

赤城鈴太郎 内勤を命ぜられ大阪支部に転勤
吉澤一郎 太平生命保険株式會社東京本社へ転勤

平塚晴雄 白木屋本店勤務

五月例会

今月は近藤高橋両兄の御奥様御披露と云ふので學生の集り方は素晴らしい都合の為高橋要ちやんは来られなかつたが恒ちやん二組合のはしやぢ方だつた。それに當日は名に負ふヤンちやんが司會者と来てゐるから一言毎に吹き出してゐた。ほんとに久しぶりで鬼さんが出席されたが相変わらず忙しい暇がないの連発、さぞかし懐具合も良い事だらう。余計の事は言ふなよ。処がそれ以上に珍鑽冠本御大が出て来てゐるじやないか、綺の着物で呉服屋の若旦那に見えるよ、併し山小屋基金をとられて悲鳴をあげてゐた。

林つて磯野の高山村の十六ミリは藝術味たつぷり、此の日の集りを一層有意義にして貰つた。

六月例会

吉沢が長の希望がかなつて東京詰となつた歓迎會だ、来たわ、近藤にない大入満員場所も日本間と一寸渡つた熱。喜んぐのは會計幹事今年度

前期分はたちまち取上げちやつてホク／＼めて居つた。乗なかつたの曾田と赤城位のものだった。話題は別でない。口の悪いそして大阪で上巻して来た熊公を交つて悪口のかげあいの様のものでつたが例の地震で崩散になつちやつた。

赤城大阪行送別會

此んなに運のいい奴があるもんか。中川じやないが技師の成績により特別内勤に命ぜられたのかさと思はれればとて外勤は望みなしと思はれたか鬼に角両極端の何方かであると思つて来る早々言つたが鬼に角大儲けだ。ボロイ話の中だらう。要ちやんたる者一言なきや。併これで大坂も吉沢の愛りが来て五人の賑かきに歸ること、思ふ。さて送別會だが何しろ話が急なので手分けでかりだしかか、つた為やつと十五名位のものだらう。それでも産談の名人中川御大を起へてビールまで出たと行てゐるのでわつしよ。話してゐる中がラン／＼十一時の鐘で追ひ出されてしまつた。

(松木)

係の交替

本年度會計係は金田一郎、会報係は平塚精雄と決定しまして既に事務を引き継ぎましたから今後凡て通知はそちらに願ひます。

松木謙三
近藤恒雄

昭和五年度收支計算書

自昭和五年四月一日
至昭和六年三月三十一日

支出金額	収入金額
820	415
3390	1900
2740	1200
685	100
7635	1380
1060	1350
8695	2050
	300
	8695

註、第二期地方會費一名分収入金志用の為十四名分
貳拾元の苦なるも貳拾元五拾銭となりたり、何れ後
期に於て不足分取立つる予定

以上は昭和六年三月三十一日までの會計報告です。第二期分会
費未納者も奥野氏を除く諸兄は全部納入済となりました。尚昭和
六年一月より五月までの会報代金松木へ未払の由で上記支出中に
加へられて居りません。
近藤氏御多忙の爲氏に代つて
新會計係 金田一郎